

アニメ聖地移住

千葉郁太郎

Chiba Ikutaro

目次

序章

恋した「聖地」で生きること

好きな場所で生きること／「好き」を中心にする／「アニメ聖地巡礼」と「アニメ聖地移住」／関係人口から定住人口になるアニメファン／本書の構成

7

第1章

ライフスタイルとしての「アニメ聖地移住」

1 東日本大震災、そしてコロナ・ショック後の地方移住熱／2 熾烈な競争への参加を強要する「東京」というシステム／3 「生きづらい」社会から「おりる」選択／4 人生を自分に取り戻す「アニメ聖地移住」という生き方

19

第2章

時代はアニメ聖地巡礼から

「アニメ聖地移住」へ

1 アニメ聖地巡礼―『らき☆すた』から『君の名は。』『すずめの戸締ま

59

り』まで／2 アニメ聖地巡礼は地域活性化に寄与するのか／3 「関係人口」を先取りしてきたアニメ聖地巡礼ファン／4 「関係人口」アニメ聖地巡礼」から「定住人口」アニメ聖地移住」へ／5 地域の「シビツクプライド」を育む

第3章 コミュニティ再生と「アニメ聖地移住」

1 地域の生活を支えるコミュニティという存在／2 「社会関係資本」とコミュニティ／3 アニメ聖地移住者がコミュニティで必要とされる理由

第4章 「アニメ聖地移住」を実現したひとびと

case1 青森県弘前市「ふらいんぐういっち」たやなおき 聖地に移住してファンによる地域おこしを目指す／case2 茨城県東茨城郡大洗町「ガールズ&パンツァー」松澤忠幸 「ガルパン」移住者第一号として10年以上聖地に住み続けて／case3 茨城県東茨城郡大洗町「ガールズ&パンツァー」原健二 多様な人々が集まる大洗の魅力／case4 埼

第5章

玉県秩父郡小鹿野町『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』高山陽平 アニメと酒の街・秩父でジン蒸留所立ち上げに挑戦／case5 静岡県沼津市『ラブライブ！サンシャイン!!』稲見光海里 彼女たちの息づかいを感じられる沼津での日常生活／case6 静岡県沼津市『ラブライブ！サンシャイン!!』尾崎豪一 聖地移住して実感した家族という存在の大きさ／case7 京都府宇治市『響け！ユーフォニアム』三井寿文 アニメで宇治を好きになり、子供の将来も考え家族で移住／case8 香川県小豆郡土庄町『からかい上手の高木さん』熊本康太郎 「高木さん」を感じる小豆島で島の魅力を日々発掘中／case9 鳥取県岩美郡岩美町『Free!』福岡咲陽子 地域おこし協力隊員として道の駅から情報発信／case10 広島県竹原市『たまゆら』深津絳大 竹原で実感するクオリティ・オブ・ライフの高さ／case11 富山県南砺市『true tears』佐古田宗幸 地域のクリエイターを支援し、地域の持続可能性を高める

「アニメ聖地移住」を通して見えた課題と処方

- 1 アニメ聖地移住者たちの共通点／2 アニメ聖地移住の課題と処方／3 あなたの街が選ばれるために

付録

『ラブライブ！サンシャイン!!』の聖地・ 沼津市の挑戦

行政が主体の移住相談会／「移住定住推進室」について／沼津市の移住事情／『ラブライブ！サンシャイン!!』ファン向け移住相談会実現に至るまで／ファン向け移住相談会の実施と反響／今後の『ラブライブ！サンシャイン!!』との関係性

あとがき

参考文献

序章 恋した「聖地」で生きること

好きな場所で生きること

「本記事を通じて『京都の魅力を発信できれば』と思いながら、気がつけば京都という町に惹き付けられている自分がありました。私はもう、多分京都に恋してしまっただと思います。」(ブログ・日々是妄想 2013年10月1日「有頂天家族探訪記⑩」より抜粋)

筆者は学生時代を京都で過ごしてから就職で岐阜県に移り、2011年離職後に京都に戻ってきました。アニメ聖地巡礼(以降、聖地巡礼)を趣味にしていますが、幸いなことに京都に戻ったタイミングで京都を舞台とした二つのアニメ作品と出会いました。一つ目は京都アニメーション制作『たまこまーけっと』(2013年)、二つ目は森見登美彦原作・ピーエーワークス制作『有頂天家族』(2013年)です。毎週放送される度に舞台となった場所を写真撮影し、ブログから聖地巡礼情報を発信しました。冒頭の文章は、私が執筆していたブログ「有頂天家族探訪記」のエピソードとして、昂たかぶる感情のままに書いたものです。聖地巡礼を通して趣味を同じくする「同業者」と出会い、物語の舞台となる街の人々とながりができ、今でも通う馴染みの店もできました。

それから数ヶ月後にやってきた再就職で、出身地である東北寄りの親類縁者も多い東京に移るか、それとも京都に留まるか、私は人生の岐路に立たされました。日本経済の中心

地・東京で働き、娯楽が溢れる華やかな生活を送ることは憧れでした。1年前でしたら躊躇なく東京での就職を決めていたでしょう。しかし聖地巡礼を通じて知った京都という街の魅力は、一種の恋の呪縛のように私を捕らえて放さず、京都住まいを続けることを決意します。東京での仕事を夢見ていた私は、「好きな場所で生きることがファーストプライオリティ。仕事はセカンド。それが幸福につながるのではないか」という考えに変わっていました。

こうして私は2013年の秋、恋した「聖地」京都で生きることを決意して、京都を舞台にしたアニメを追い続け、日常を愉しみながら今日に至ります。

「好き」を中心にすえる

厚生労働省の「令和5年就業条件総合調査の概況」によると日本人の平均休日は115・6日、つまり大半の方は365日のうち約250日は労働に従事していることとなります。労働時間と余暇に関する統計は世間の関心を集めますが、多くの人の頭には仕事とプライベートをはっきりと区別し、平日は仕事が生生活の大半を占め、終業後か週末の僅かな時間に私的な幸福を追求するのが「常識的」な人間の生き方だという思い込みがあるのではな

いでしょうか。

地元の高校を卒業したら首都圏や大都市圏の大学に進学し、東京や大阪に本社がある大企業に総合職として就職する。2、3年ごとにジョブローテーションで配属替え、場合によっては思いもなかった地方への転勤の辞令を受け取っても唯々諾々と応じる（もちろん社内で自分の配属希望は伝えるとしても）。会社の期待に応えることで一步一步昇進を重ねていく。一昔前までの典型的な高学歴・高収入の「人生すごろく」です（今では死語ですが）。しかし皆さんもおわかりの通り、このような人生すごろくは通用しなくなって久しいです。今や売上数兆円を誇った大企業が外資傘下に入ったり、経営不振から身を切り売りする時代です。また人手不足と言われる割には、「早期希望退職何千人を募集」のような報道も後を絶ちません。

大企業で生き残れば安定した暮らしが待っているかといえばさにあらず、中間管理職が「罰ゲーム」として忌避されるように現場は疲弊し切っています。新しいスキルを学んで変化の激しい時代でも必要とされる人材になれという社会的風潮は、他者を撥ね除けるだけの実力をつけろという能力主義、自己責任論の絶え間ない圧力となっています。こうした社会に身を委ね続けて私たちはどこまで耐えられるのでしょうか。

もしも社会に「生きづらさ」を感じているとしたら、恐れを抱かず自分で自分の道を切り開くこともありではないでしょうか。「好き」を貫き通すことはなにも特別な才能がなくとも、普通の人でもできることだと思います。もう仕事を中心に据えるのではなく、「好き」を中心に生活を設計しませんか、というのが私からの提案です。「好き」の内容がスポーツだろうと農作業だろうとアニメだろうと、そこに優劣はありません。アニメ「好き」を貫き通して住む場所を選び、生活することを決意した人たちを複数取材しましたが、その中で見えてきた幸福のあり方を考えたいと思います。

「アニメ聖地巡礼」と「アニメ聖地移住」

2016年に公開された映画『君の名は。』(新海誠監督)は、日本アニメ映画歴代興行収入2位(2025年現在は3位)という偉業を成し遂げただけでなく、アニメに登場した場所を巡る「聖地巡礼」という行為を一般的なものにしました。『君の名は。』の舞台となった東京都新宿区の須賀神社や岐阜県飛騨市には映画を見た多くの人々が訪れ、当時の『君の名は。』聖地巡礼の盛り上がりは現在でも語り継がれています。

2000年代は聖地巡礼がまだアニメファンの中でもコアな趣味でしたが、2016年

の『君の名は。』ブームでニュースやワイドショーで取り上げられるようになり、「聖地巡礼」という言葉は同年のユーキャン新語・流行語大賞のトップテンに選出されました。今では自分の趣味を人に紹介する際に、「聖地巡礼」といえば詳細な説明をしなくとも通じるようになりました。20年前と比較すると隔世の感があります。

アニメの聖地巡礼は古くは1990年代から行われ、2000年代後半に『らき☆すた』（京都アニメーション制作 2007年）、『けいおん!』（同前 2009年）などの作品で徐々にアニメファンに浸透・拡大します。同じ頃、秋田県羽後町で有名イラストレーター・西又葵^{にしまたあおい}描き下ろしイラストをパッケージに使った「あきたこまち（『萌え米』とも呼ばれました）」の販売は、当時として非常に奇抜なアイデアであったことから注目を集めました。この頃から、アニメ、あるいはサブカルチャーが「地域おこし」に与える影響が注目されていきます。

近畿大学教授・岡本健が提唱しましたが、聖地巡礼をする人々にも様々な「層」が存在します。最も尖った層は毎クール新しく放映されるアニメの聖地を求め、我先にと全国各地を飛び回り、いち早くネットで情報発信を行う人々です。ネット情報を参考にして聖地巡礼で訪れるうちに地域を好きになり、その街や人、同好の士との交流を求めて実家に帰

省する感覚でリピートする人々もいますし、人気作品の舞台となった場所を一度見たいと軽い旅感覚で訪れる人々もいます。

聖地巡礼を通してその街や土地、地域の人々が好きになり、ついには移住を決意して実行する人、そのような事例を本書では「アニメ聖地移住（以降、聖地移住）」と名付けます。

聖地巡礼はこれまで学術的な研究が行われ、先人となる研究者の方々が多数の論文を残してきました。学術分野としては観光学や社会学であり、聖地に訪れる人と地域、コンテンツホルダーとの関係性の研究が主流であるように感じます。それでは聖地移住とは単にその延長線にあるものでしょうか。私は、聖地移住とは聖地巡礼の枠に収まりきらない、新しい可能性を秘めたものであると考えています。

関係人口から定住人口になるアニメファン

アニメ聖地巡礼が学術研究の対象として取り上げられるようになったきっかけの一つに、先述した『らき☆すた』の舞台となった埼玉県鷲宮町（現・久喜市）を大勢のファンが訪れたことが挙げられます。いわゆるオタクと呼ばれるコアなアニメファンは閉鎖的でコミュニケーションが不得手と一般的に考えられていたため、彼らが地元住民と積極的に交流

し、リピーターとして訪問する姿は非常に新鮮でした。これは地元側がアニメファンを積極的に受け入れたことや、地元でアニメイベントを開催することに権利元が協力的だったことなどが成功要因として考えられています。この現象は一過性の盛り上がりには終わらず、聖地巡礼を通してファンの中に「鷺宮」という土地と人々に対する愛着を醸成していきました。

昨今の地域活性化論では、単なる旅行者である「交流人口」、地域に住む「定住人口」の中間に位置する「関係人口」が注目を集めています。関係人口とは地域のファンとしてリピーターになり、祭りや地域活動に参加するなど積極的な交流を行うアクティブな人々のことです。聖地巡礼は関係人口という概念が誕生する以前からこれを実践してきたと言えるでしょう。『らき☆すた』のような事例はその後も規模の大小こそあれ日本各地で誕生しており、オタクに対する社会的イメージの変化や、オタクを自認する人々の増大から聖地巡礼が地域社会にもたらす影響は無視できないほど大きくなっています。

地域との絆を深めていく中で新しい人生を切り開く聖地移住は、まさに関係人口から定住人口への進化という見方もできると思います。確かに移住するということは地域社会に完全に入り込むことであり、「ヨソ者」から「ウチの者」となることが求められ、簡単な

ことではありません。移住したものの、地域社会に溶け込むことができず結局は元の場所に戻ってしまう、といった「失敗」事例が多数あることも事実です。聖地移住が持つ様々な課題にも向き合わねばなりません。

本書の構成

第1章では現在の「地方移住ブーム」の一つの派生である聖地移住を、社会的背景から考察します。現在、地方移住は東日本大震災やコロナ禍を経て一つのムーブメントになっています。特に「失われた30年」と2000年代以降本格化した新自由主義改革を経て、現代社会は個人に対する圧力が非常に強い生きづらい社会になりました。そこからあえて脱線して人生の主導権を自らに取り戻すライフスタイルを提案したいと思います。

第2章では聖地移住という現象がどのような経緯から生まれたのか、聖地巡礼の起源と発展まで90年代に時間軸を戻して解説したいと思います。その中で関係人口や定住人口という地域活性化論の概念を用いて、聖地移住はどのような社会的意義を持つのかを考えたいと思います。

第3章では少し視点を変えて「コミュニティ」をとりあげます。かつて社会を支えた

「血縁・地縁・社縁」とは異なるものとして、サブカルチャーなどの「趣味縁」というつながりがあります。地方は人口減少・高齢化により従来のコミュニティの維持が非常に難しくなっています。「趣味縁」は地方コミュニティにどのような影響を及ぼすのか、その可能性を聖地巡礼・聖地移住を題材として、「社会関係資本」という概念を使って考えたいと思います。

第4章では聖地移住を実現した人々へのインタビューを通して、どのようなライフヒストリーを経て聖地移住を決意するようになったのか、そして移住後はどのような生活を送っているのか具体事例を紹介します。

しかし、聖地移住はそれまでの人生を一旦リセットすることでもあり、簡単にできることではありません。第5章では実例をもとに問題点を洗い出し、聖地移住をめぐる課題とその処方について考えたいうえで、最後に自治体へいくつかの提言をしたいと思います。

さらに付録では、『ラブライブ！サンシャイン!!』の舞台である沼津市ぬまづしの行政職員たちが行っている先進的な取り組みを紹介します。

聖地移住という現象を1冊の本にまとめることや、聖地巡礼などのサブカルチャーを地域活性化論の組上そじょうに載せて議論すること、さらに現代社会の個人のあり方まで深掘りして

新しいライフスタイルを提案することは、野心的かつ無謀な試みかもしれません。ですが、その中で何かしら新しい気づきが皆様にもたらされることを願い、筆をとることにしました。アニメファンをはじめ、聖地にお住まいの方（受け入れ側）、自治体の職員ほか、より多くの方に届きますように、最後までお付き合いいただけますと幸いです。

なお、本書は第1、2、3章が現状分析、第4章が実例紹介で第5章がまとめとなっていますので、実例に興味があるという方は第4章を先に読んでから第1章に戻っても大丈夫です。興味のあるところから読み始めてください。なお、章タイトル、見出しでは正確性を重視して「アニメ聖地巡礼」「アニメ聖地移住」と記載しますが、文中はやや煩わしさがあるため「聖地巡礼」「聖地移住」と略称で記載させていただきますことをご了承ください。また、アニメ作品には作品名に制作会社、放送開始年を追記しております。

アニメ聖地移住

千葉郁太郎

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,166円（10%税込）

発売日：2025年8月7日

ISBN：978-4-7976-8161-1

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)